

2022年3月6日 主日礼拝

説教題「主イエスのリクルート」ルカによる福音書5章1～11節

主任牧師 加藤 誠

「イエスはシモンに言われた。『恐れることはない。今から後、あなたは人間をとる漁師になる。』そこで、彼らは舟を陸に引き上げ、すべてを捨ててイエスに従った」(ルカ5章10節)

今日の場面は、主イエスがシモンたち漁師をリクルートして、彼らが本格的に主イエスに従い始めた場面です。ヨハネ1章ではシモンの兄弟アンデレがまず主イエスと出会い、そしてペトロを主イエスに引き合わせたと書かれており、今日の場面の直前にシモンは主イエスにしゅうとめの病気を癒してもらっていますから、彼らはすでに主イエスを知っていたのです。ただまだ本格的に弟子として従うまでではなかった。その彼らが、今日の場面を通して、漁師としての仕事を後ろにおいて本格的に弟子として従い始めるという、深い覚悟に導かれたのでした。

場所はゲネサレト（ガリラヤ湖の別名）の湖畔。主イエスの話を聴くために大勢の群衆が押し寄せてきました。主イエスは湖畔で網の繕いをしていたシモンの舟に頼んで少し沖に出させ、舟の上から浜辺の人びとに向かって教えられます。3節「腰を下ろして舟から群衆に教え始められた」とあります。主イエスはマタイ5章の山上の説教の場面でも「腰を下ろして、教え始めて」おられます。当時の習慣として、町の礼拝堂では聖書を朗読したり解説する時、人は床に座って話をし、聴く方も座って話を聴いたのだそうです。そういえばマルタとマリアの家で主イエスが教えられた時、マリアは人びとと一緒に「座って」話を聴いています。

話をする、話を聴くときに「座って」というのは大切ですね。「どうぞお座りください」というのは、「立ち話」ではなく「じっくり話をききます。話をしましょう」ということを意味します。その点で、私たちは日頃、神さまの前に「座って」いるでしょうか。「5分でも座って」御言葉の前に姿勢を整えることができているでしょうか。ずっと立ちっぱなしで、せわしなく神さまの前を素通りしてしまっていないでしょうか。確かに毎日忙しく、いろいろな仕事が次から次へと座る間もない。でも忙しくしている時こそ、第一にすべきものを見失わないように、神さまの前に「座る」ことが大切なのではないでしょうか。先日、ご家族の看病に毎日心を注いでおられる方と電話で話した時、「早く礼拝堂に行って座りたいです。教会に行くとホッとします」と言われていました。毎日大切な仕事で忙しくしている時こそ、「イエス様、語ってください」と「主イエスの前に座る」ことが大切なのではないでしょうか。なぜなら主イエスの言葉は、この世界でいろいろな課題を背負って生きる私たちを根底で支え、慰め、励ましてくれる命の原動力だからです。

主イエスが群衆に語り終えたとき、シモンに「沖に漕ぎ出して網を下ろし、漁をなさい」と言われます。プロの漁師の立場からすれば「カチン」とくる言葉だったことでしょう。そもそも漁は夜間か早朝にするものであり、真昼は漁に適していません。しかもその日の明け方までシモンたちは夜通し働いて何も取れなかった。「今日は無理」とプロの漁師が判断したのです。それを素人である主イエスから「網

を下ろしてみろ」だなんて、わたしならムツとしてしまうだろう場面です。けれどもシモンは「しかし、お言葉ですから網を下ろしてみましよう」と答えました。「しゅうとめの病気を治してもらった恩」が心にあったのかもしれませんが。ところがその直後、二艘の舟が沈みそうになるほどたくさんの魚が捕れて、ペトロたちは恐ろしくなります。「いったいこの方はどういう方なのか。神の子なのか!？」と。そして、先ほどの主イエスの言葉を心の底では信じていなかった自分の不信仰が見透かされていると思ったのでしょうか。「罪深いわたしから離れてください」と主イエスの前にひれ伏したのです。

このエピソードは、主イエスに従い、弟子となるとはどういうことを教えてくれています。一つ目に、主イエスの弟子は、主イエスがこの世界を見ておられる、そのまなざしで世界を見るように招かれているということです。シモンは「今日の湖はどんなに頑張っても漁は無理、努力しても無駄」というまなざしで湖を見ていました。けれども主イエスは同じ湖を見ながら、そこに神さまの恵みと働きの可能性を見ておられました。ですから「網を下ろしてみなさい」と言われたのです。「主よ、今日この世界を見ておられるあなたのまなざしを教えてください」。これが弟子に求められる第一の祈りです。

二つ目は、私たちには現実を変える力はないけれど、主イエスは現実を変える力を持っておられるということです。弟子に求められるのは能力ではなく、主イエスへの信仰、信頼です。聖書で「召命」を受けた人たち、例えばアブラハム。聖書は彼がどんな能力をもっているかには関心を持ちません。アブラハムに求められたのはただ一つ。神の言葉に従い、神に委ねる信仰でした。「神さま、あなたの力を信じます。あなたが働いてください」。これが弟子に求められる第二の祈りです。

そして三つ目。ペトロは「主よ、わたしは罪深い者なのです」と告白しましたが、これは当時のユダヤ教の信仰として「神は、罪深い者、ケガれた者を遠ざけられる。そういう人間は神の近くにはいない!」という教えがあったからです。けれども主イエスは私たちの「罪深さ」「不信仰」を問題にされません。いやむしろ「罪深く不信仰な者」と共に歩むために、そしてこの暗闇に覆われた世界の中であって、一緒に神さまの慈しみを見出していく働きに私たちを呼び出すために来てくださったのです。「恐れることはない。今から後、あなたは人間をとる漁師になる」。この「人間をとる」とは「生きたまま神の救いにすくいとり」という意味です。ペトロがどんなに罪深い人間であるかは関係ない。「死んでいる者を生き返らせ、神の愛のもとに連れ戻す主イエスの恵みの働きを一緒に見ていくように!」という招きの言葉、リクルートの言葉です。この主イエスと歩むとき、暗闇におおわれた世界の中で、神さまへの賛美を与えられていく。その弟子に求められている三つ目の祈りは、「主よ、あなたと共に、この世界で神さまの恵みを見出し、証しする働きを担わせてください」と祈っていくことです。主イエスのまなざしに学び、主イエスの力に信頼し、主イエスと共にこの世界で神さまの恵みの働きを見出す働きを担う。この主イエスのリクルートに応えていきたいのです。